様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年６月１５日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008～2009
課題番号：２０７２００７０
研究課題名（和文）　現代アイルランド詩における多様性・アイデンティティ・伝統についての総合的研究
研究課題名（英文）　Studies on Diversity, Identities and Traditions in Contemporary Irish Poetry

研究代表者
菊地　利奈（KIKUCHI RINA）
滋賀大学・経済学部・准教授
研究者番号：00402701

研究成果の概要（和文）：本研究では、現代詩の世界で大きな影響力を発揮しているアイルランド詩の最近の動向に注目し、各詩人の作品分析を試みた。今年度の研究成果としては、特に Matthew Sweeney の作品に注目し、最新詩集『黒い月』(*Black Moon*, 2007)を中心とした作品分析論文を３本発表したことが挙げられる。また、Sweeney や Paula Meehan との対談を通してまとめたエッセイを２本発表した。Sweeney や Meehan を中心とした複数の詩人についての英語論文の校閲を終了するとともに、翻訳解題、一般読者むけのエッセイなどを発表し、英語が苦手な読者にも現代アイルランド詩に親しんでもらうことを目的としたホームページ「現代アイルランド詩の世界」を開設した。

研究成果の概要（英文）：My main focus was on the latest publications of Matthew Sweeney, Paula Meehan and Brendan Kennelly. I have worked on the translations of the poems from the latest book by Sweeney and published 3 papers on his work. Another achievement is the publication of 2 essays targeting non-academic readers, which are based on the interviews with Sweeney, Meehan and Kennelly, Also, in a hope of spreading more information about contemporary Irish poetry for Japanese readers who are interested in poetry itself but not familiar with reading poems in English, I have set up the homepage, Contemporary Irish Poetry with Japanese Translation.

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２００９年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：現代アイルランド詩、アイルランド文学、現代詩、アイルランド、英語文学、文

学論、翻訳

１．研究開始当初の背景

Yeats 以降のアイルランド詩では、アイルランドにもイギリスにも属せない、いわゆる「ロスト・アイデンティティ」が大きなテーマのひとつであった。20 世紀前半のアイルランド英語詩には、母国及び母語を失い、アイルランド人としてもイギリス人としても自我を確立できず、アイルランド詩の伝統にもイギリス詩の伝統にも属することができないと感じた詩人たちの苦悩がみてとれる。このようなアイルランド詩の特徴が、「喪失」としてではなく、「二重の伝統・文化を有する」と、肯定的に定義されはじめたのは、1990 年代以降であった。

上記をふまえ、これまでの研究で私は、「アイルランド詩の伝統」という Yeats の遺産を受け継いだアイルランド詩人たちの葛藤について分析をおこない、その上で、伝統をふまえながらも、「伝統」というステレオタイプからの脱却をはかる Brendan Kennelly の作品に注目し、Yeats の残した遺産の問題点と新しい形での「アイリッシュ・アイデンティティ」の表現法ついて研究をおこなってきた。同時に、Yeats の築いた「アイルランド詩の伝統」と戦い、1990 年代以降、アイルランド詩に新たな一面を加えた女性詩人たちの活躍にも注目し、男性中心の詩の伝統のなかで自らのアイデンティティを表現できる言葉を探求した女性詩人 Eavan Boland の作品についての分析もおこない、これらの論考を通して、20 世紀のアイルランド詩人たちが、「アイルランド詩の伝統とは何か」という問題にどのように取り組み、その伝統のなかで自らのアイデンティティをどのように探求し、表現してきたかについて、研究をすすめてきた。

上記研究を基盤として、本研究は、Kennelly や Boland より若い世代の、より多様化したアイルランド詩人たちのあり方に注目することを目的としてスタートした。生まれ育ったダブリンを「Home」と定義し、ダブリンというコミュニティとダブリンという都市におけるアイルランド人（あるいは「ダブリン子」）としての生活に密着し、アイルランドのかかえる社会問題等に注目しながら「ダブリン」を詩の世界で再現する Paula Meehan と、ドイツや（旧）東ヨーロッパ文学の影響を強く受け、ヨーロッパ各国で活躍する Matthew Sweeney。このふたりの詩人を研究対象の中心におき、彼らの作品にどのような形で「アイリッシュネス」や「アイリッシュ・アイデンティティ」があらわれているか・あらわれていないのか、グローバル化がすすみ、アイルランド詩人のあり方が多様化し、国境を越えた詩人同士の交流が活発な今日の社会において、「アイルランド詩人としてのアイデンティティ」はどのように定義できるものなのか・定義することは必要なのか、考察を深めることを目的として本研究は始まった。

２．研究の目的

アイルランド詩人のあり方が多様化し、国境を越えた詩人同士の交流が活発な現在における「アイルランド詩人としてのアイデンティティ」の定義と定義の必要性について、1990 年以降のアイルランド英語詩に注目し、考察することが本研究の目的であった。具体的には、すでに先行研究も豊富で「アイルランド詩人」としての地位を確立している Brendan Kennelly や Eavan Boland の詩をふまえたうえで、まだ日愛両国内で研究がさほどすすんでいない Paula Meehan と Matthew Sweeney を中心に、これまでの自らの研究を

さらに発展させることを目的とした。

ダブリンを中心に活躍する「地元密着型」とも呼べる Meehan と、世界中をとびまわるボヘミアン的な Sweeney という、一見相反する性質を持つとみられる二人の詩人の詩の根底にながれる「アイリッシュネス」について、彼らの昨今の作品を中心に分析をすすめ、Yeats 以降のアイルランド詩の「伝統」として考えられるようになった「アイリッシュネス」の変容について考察しながら、21 世紀のアイルランド詩における「アイリッシュネス」の必要性と多様性について考察を深めることを、研究の中心軸とした。

３．研究の方法

従来の文学作品研究における作品、詩集、作品の書かれた社会的背景などの分析に加え、詩人本人が論じる作品の書かれた背景、詩人本人の考えなどを取り入れながら、作品分析をすすめた。現代詩研究の大きな特徴のひとつとして、詩人本人との対話が成り立つことが挙げられる。本研究でも、詩人の発言に依存しないよう十分な注意を払いながら、この特徴をとりいれた。詩人本人による詩の「朗読」や、作者本人のコメントをも取り入れながら、作品分析をすすめたことは本研究のひとつの特徴であろう。

Matthew Sweeney については、最新作『黒い月』(*Black Moon*, 2007) を中心に、それ以前の詩集『サンクチュアリ』(*Sanctuary*, 2004)、『魚の匂い』(*A Smell of Fish*, 2000)、『ブライダル・スィート』(*The Bridal Suite*, 1997) との比較を通しながら、詩人本人が重視する「現代性」の要素や「アイリッシュ・アイデンティティ」の問題について考察をすすめた。

また、詩人本人が考える「現代性」や「アイリッシュ・アイデンティティ」の概念について、インタビューをおこない、解明につとめた。Sweeney の詩集は、各詩集にそれぞれちがったテーマ性と特徴があらわれる傾向にあるので、それぞれの詩集のテーマを尊重しながら、論文執筆をすすめることを心がけた。

Paula Meehan については、刑務所内での女性囚人たちの力関係を描いた劇作品『独房』(*Cell*, 2000) やラジオドラマの脚本『犬のための音楽』(*Music for Dogs*, 2008)、最新詩集『雨を彩る』(*Painting Rain*, 2009)に注目し、彼女の作品のなかにあらわれる「ダブリン (アイルランド)」と「アイリッシュ・アイデンティティ」について分析をすすめた。ラジオ劇については、音声ファイルを入手し、テキストだけにたよらない分析をすすめた。

Meehan についても、彼女の作品にあらわれる重要な要素のひとつである「アイルランド (あるいはダブリン) というコミュニティの重要性」について、対談をおこない、解明につとめた。

これらの分析と考察については、学会誌などを通じ学術論文として発表するだけでなく、一般の読者向けにもアイルランド詩についての情報開示をおこなえるようホームページ開設の準備をすすめた。そのための具体的な作業 (デジタルデータの加工やホームページ作成作業) は、専門業者に委託し、作業の合理化をはかった。

４．研究成果

研究成果として、1) Matthew Sweeney の最新詩集『黒い月』を中心とした作品分析論文を 3 本発表した。「詩集 *Black Moon* にあらわれる『忍びよる恐怖』についての分析—*Black Moon* 以前の詩との比較を通して—」(『エール』第 29 号、20－34 頁) では、2007 年に出版された本詩集に描かれる「現代社会の恐怖」に言及し、Sweeney の初期の作品との比較を通しながら、Sweeney の詩にあらわれる「現代性」について論じた。

Sweeney の『黒い月』については、翻訳もすすめ、詩学会研究会での発表をおこなった。それらの成果は、翻訳論の視点から作品を論じた論文、「現代アイルランド詩 ： マシュー・スウィーニー試訳考(一)」(『彦根論叢』

第378号、19-39頁）と、「現代アイルランド詩 ： マシュー・スウィーニー試訳考(二)」『彦根論叢』第379号、1－23頁）に発表した。これらの試訳考については、今後、続編を書く予定である。社会への知識の還元に貢献するため、『彦根論叢』に発表した論文については、インターネット上で公表している。その他の論文についても、インターネット上での公開をすすめていく予定である。

その他、2）Sweeney や Paula Meehan との対談を通してまとめた一般読者向けのエッセイ2本を、津軽一間舎発行の文芸誌に発表した。「言葉 41」(『ム』第41号、12頁）では、Paula Meehan が語る「コミュニティの破壊と言葉の破壊」について論じ、「言葉 43」（『ム』第43号、31頁）では、Matthew Sweeney の考える現代社会の現実と事実の問題について、Sweeney が強く影響を受けたカフカの作品や、映画『チェンジリング』との比較を通して、論じた。

本研究の学術的成果のひとつとして、3）Brendan Kennelly、Eavan Boland、Paula Meehan らの作品について論じた英語論文の出版にむけての準備をすすめ、本英語論文の校閲を終了した。今後出版にむけての準備を進める予定である。

学術的な活動にのみとどまらず、4）翻訳解題、一般読者を対象としたエッセイなどを発表し、英語詩を言語で読むことが苦手な読者にもアイルランド詩に親しんでもらうことを目的としたホームページ「現代アイルランド詩の世界」を開設した。ホームページでは、今現在活躍しているアイルランド詩人たちについての紹介や、彼らの作品の翻訳、彼らの作品についての情報の入手方法など、以前に比べ入手しやすくなったとはいえ、まだまだ専門家以外には情報が入手しにくい現代アイルランド詩についての情報をわかりやすく説明している。今後、写真や朗読音声ファイルなども充実させ、一般読者にとって、より親しみやすいページにしていくことを計画している。

2009年7月に予定していた国際学会(IASIL、国際アイルランド文学学会グラスゴー大会）での口頭発表が、発表が受理されていたにもかかわらず、直前になって医師の診断書のもと中止となったことは残念であった。また、その後も健康上の問題から、計画通りに研究をすすめられなかったこともあった。

健康上の理由から、すべてが研究計画通りにはこんだわけではなかったが、上記に記した各研究成果は、国境を超え、現代詩の世界で大きな影響力を発揮しているアイルランド詩の最新情報を分析しているという点で、文学研究上の意義があると考える。2）のエッセイは、日本で詩作活動をおこなう人々にむけて、同じく詩作活動をおこなうアイルランド詩人たち「声」を伝えるという点でも有意義であったと考える。1）における3本中2本の論文が持つ翻訳解題的要素は、専門家以外の人々に対して現代詩への理解をほどこすという意義を持ち、同様に 4）のホームページについても、日本の一般読者へ発信する情報としての意義があり、専門知識を社会へ還元するという意味からも重要な役割を果たすと考える。

専門的な研究成果とともに、専門的学術分野だけに限られない広い範囲での文学活動の成果をあげられたことは、有意義であったと考える。今後も翻訳や翻訳解題をふくめた研究発表をすすめ、ホームページの充実をはかり、現代アイルランド詩の「今」を伝え、分析すべく、研究を発展させていく予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① <u>菊地利奈</u>「詩集 *Black Moon* にあらわれる『忍びよる恐怖』についての分析—*Black Moon* 以前の詩との比較を通して—」『エール』査読有、第29号、2009年、20－34頁

② <u>菊地利奈</u>「現代アイルランド詩 ： マシ

ュー・スウィーニー試訳考(二)」『彦根論叢』査読無、第379号、2009年、1－23頁
（http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/eml/Ronso/379/kikuchi.pdf）

③ 菊地利奈「現代アイルランド詩 ： マシュー・スウィーニー試訳考(一)」『彦根論叢』査読無、第378号、2009年、19-39頁
（ http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/eml/Ronso/378/kikuchi.pdf）

〔学会発表〕（計４件）

① 菊地利奈「Paula Meehan, ‘Return and No Blame’ and ‘My Father Perceived as a Vision of St Francis’」詩学会研究会第188回、2009年11月21日、東京医科大学

② 菊地利奈、「Matthew Sweeney, ‘The Snake’ and ‘Black Moon’ from *Black Moon*」詩学会研究会第185回、2009年6月6日、東京医科大学

③ 菊地利奈、「Matthew Sweeney, ‘The Door’ and ‘The Snake’ from *Black Moon*」詩学会研究会第184回、2009年5月23日、東京医科大学

④ 菊地利奈、「Matthew Sweeney, ‘Underground’, ‘No Sugar’and ‘Floating’ from *Black Moon*」詩学会研究会第183回、2009年4月25日、東京医科大学

〔その他〕

ホームページ等

① 菊地利奈「言葉43（マシュー・スウィーニー)」『ム』(津軽一間舎）第43号、2010年、31頁（エッセイ）

② 菊地利奈「言葉41（ポーラ・ミーハン)」『ム』（津軽一間舎）第41号、2009年、12頁（エッセイ）

③ ホームページ「現代アイルランド詩の世界」（http://poetryfromireland.jp/）

６．研究組織

(1)研究代表者

菊地　利奈（KIKUCHI RINA）
滋賀大学・経済学部・准教授
研究者番号：402701

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし